



①^{みつば}三葉神社

祭神は^{あめのこやねのみこと}天兒屋根命、^{たけみかづちのみこと}建御雷命、^{いわいぬしのみこと}斎主命。創建は寛文 11 年（1671）正月。

社名の由来は境内にあった松の木の葉が三又の松葉を付けたことによるといいます。集落全体の氏神ではなく、当地の新田を開拓した 7 軒の家の子孫だけで祀られている珍しい神社です。7 軒の家で順番に役を勤め、神社附属の神田もその家の者たちだけで耕作し、収穫した米で搗いた餅をお供えしたりします。こうした組織形態はいわゆる「^{みやざ}宮座」と呼ばれるものに近く、旧駿河国内では珍しく、焼津市域では現存唯一の事例となります。

更に注目すべきことは、この七軒の家が古来より田尻の地に住んでいた者たちではなく、未開の地を求めて入植してきた者たちであると考えられることです。こうした人々と旧住民との間には当然トラブルもあったと考えられ、そうした厳しい状況の中、結束を固め神仏に祈るため、自分たちだけの氏神を祀る三葉神社を創建したと考えられます。

現在は 1 軒減り、6 軒の家が交代で祭祀の当番となり、神社の鍵を管理しています。



当番札と神社本殿の鍵

②国生丸殉難覚霊塔・第八国生丸殉難追悼碑

○国生丸—戦時下の漁船—

カツオ漁船であった国生丸は碑文に、「食糧難打開を水産に依るの国策に則り戦時下危機を冒して不撓不屈職域奉公に邁進す」とあることから戦時下に危険を冒して食糧難打開のため出港したことがわかります。昭和 18 年（1943）8 月 25 日に清水港を出た国生丸は、翌月 5 日に硫黄島付近で潜水艦の攻撃を受けて沈没し、乗組員 5 名が犠牲になりました。この碑は昭和 25 年（1950）9 月に船主の増井磯太郎氏によって犠牲者を弔うために建てられたものです。

国生丸については、詳しい記録が残っていないためなぜ危険な海域へ赴いたかは不明ですが、戦中、軍部からの指示で戦地へ動員される「徴用船」と呼ばれる民間の商船・漁船が多くありました。特に日中戦争の勃発以降、戦地の拡大とともに漁船の徴用が激増しました。比較的大型の漁船は軍需物資や兵員の輸送にあてられ、トロール船、底曳船などは掃海艇としての役割を果たしました。また、中には戦地で漁業に従事し、軍需用の食糧生産に使用さ

れたものもありました。

焼津漁船の徴用も昭和 13 年（1938）7 月に漁船 7 隻、乗組員 50 名が徴用されたことに始まり、昭和 20 年（1945）までに判明しているだけでも 113 隻の漁船が徴用されました。このうち 59 隻の船が沈没し、401 名の乗組員が犠牲になりました。

○第八国生丸－マリアナ海域の漁船大量遭難－

昭和 40 年（1965）10 月 7 日、静岡県内（焼津市・御前崎市・吉田町・戸田村）のカツオ漁船 7 隻がマリアナ海域アグリガン島付近で、台風 29 号の直撃を受け遭難しました。県は遭難対策本部を設置し、海上保安庁・自衛隊も捜索に当たりましたが、死者・行方不明者は合わせて 209 名に達する大惨事となりました。

焼津のカツオ漁船であった第八国生丸の乗組員 30 名も行方不明のままとなり、同年 11 月 13 日に同じ焼津の漁船、第 3 千代丸の乗組員らとともに合同葬が焼津魚市場で行われました。12 月には遭難者慰霊団が結成され、県練習船富士丸を現地に派遣し慰霊祭が行われました。第八国生丸は田尻の船であったため、昭和 41 年（1966）10 月にこの地に追悼碑が建てられました。

また、同年浜当目には第 3 千代丸遭難慰霊のためマリアナ観音が建立されました。

アグリガン島付近の県内遭難漁船と遭難者数

船名	所属港	所有者住所	進水年月	乗組員	遭難者数
第 8 国生丸	焼津	焼津市田尻	昭和 29.8	30 人	30 人
第 3 千代丸	焼津	焼津市浜当目	昭和 33.5	42 人	42 人
第 8 海竜丸	御前崎	榛原郡御前崎町	昭和 28.10	32 人	32 人
第 5 福德丸	吉田	榛原郡吉田町	昭和 25.2	31 人	31 人
第 3 金刀比羅丸	戸田	田方郡戸田村	昭和 30.3	41 人	41 人
第 3 永盛丸	戸田	田方郡戸田村	昭和 38.3	35 人	32 人
第 11 弁天丸	戸田	田方郡戸田村	昭和 38.3	40 人	1 人
計 7 隻				計 251 人	計 209 人

『焼津市史 図説・年表』（焼津市、2008 年）より作成



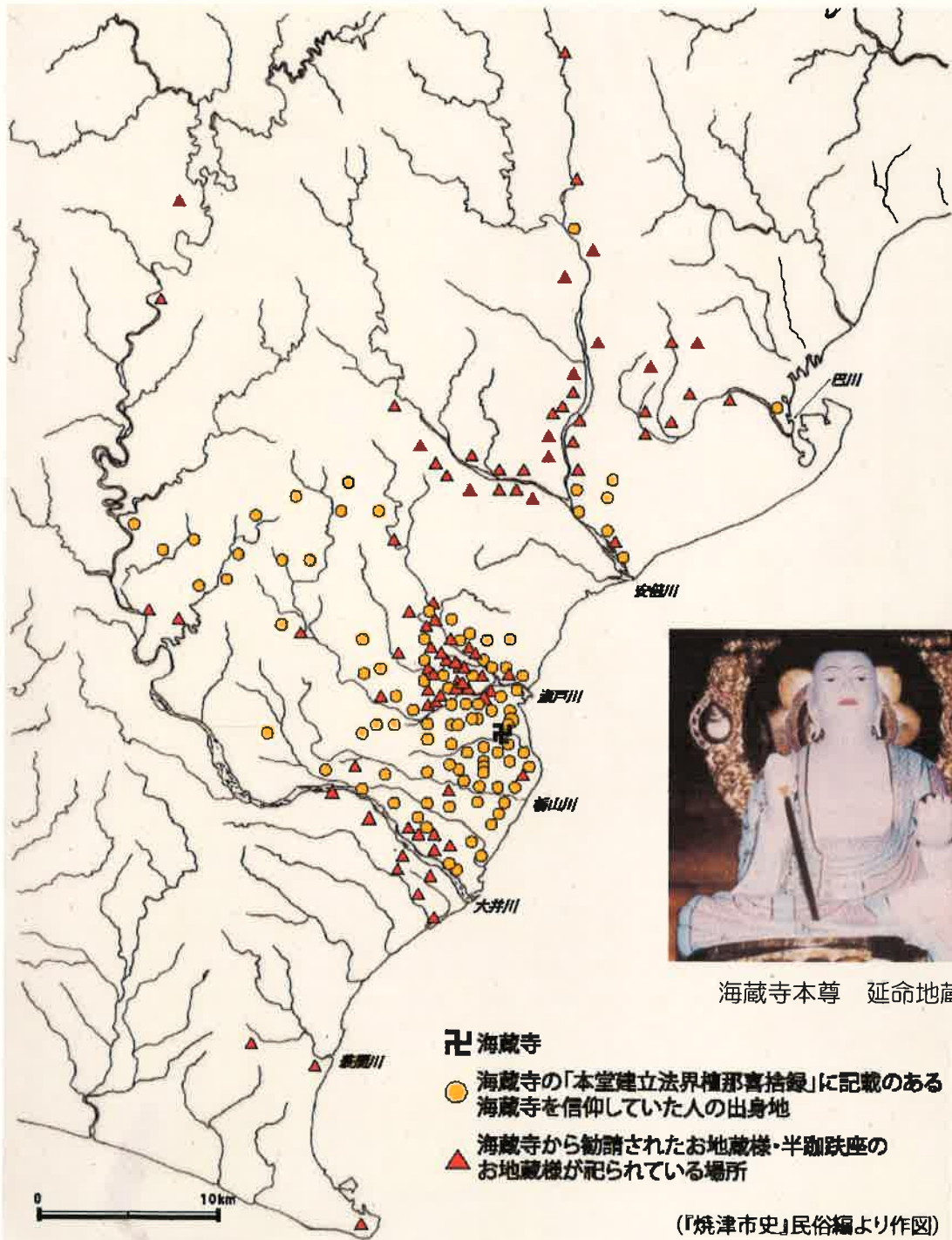
↑ 転覆した漁船（戸田港の第 11 弁天丸）



↑ 第 3 千代丸遭難慰霊のマリアナ観音

なみよけしそ
③波除地蔵

このお地蔵様は小川^{かんじょう}の海蔵寺から勧請されたお地蔵様です。海蔵寺の本尊は広く人々に信仰され、漁村では海上安全や大漁祈願を、農村では洪水防災の波除・川除地蔵として海の近くや焼津の小さな川から大井川、瀬戸川、朝比奈川、安部川など広い範囲にわたって祀られてきました。これらのお地蔵様は海蔵寺本尊と同じ、半跏趺座^{はんかふざ}（右足を組んで左足を下げた組み方の姿）の姿をしている坐像が多いです。



海蔵寺本尊 延命地蔵尊

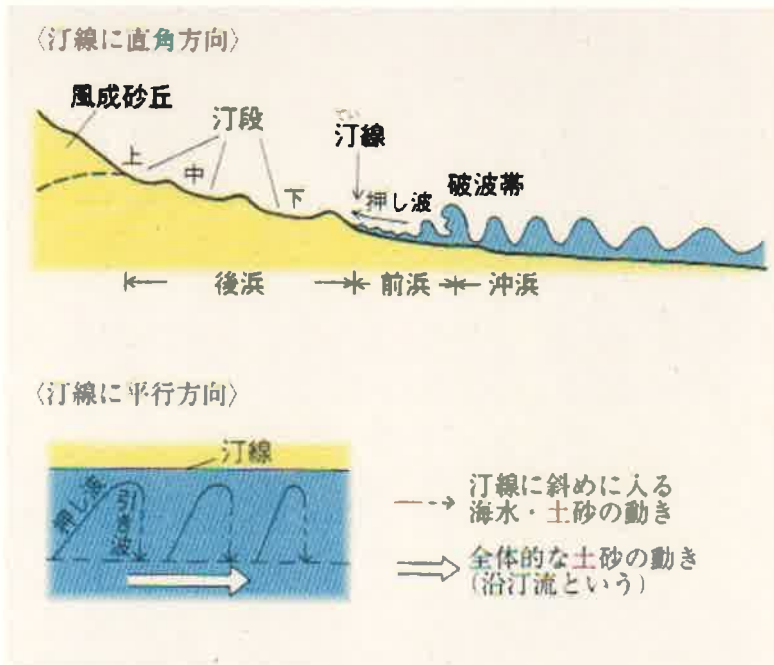
- 海蔵寺
- 海蔵寺の「本堂建立法界檀那喜捨録」に記載のある海蔵寺を信仰していた人の出身地
- ▲ 海蔵寺から勧請されたお地蔵様・半跏趺座のお地蔵様が祀られている場所

(『焼津市史』民俗編より作図)

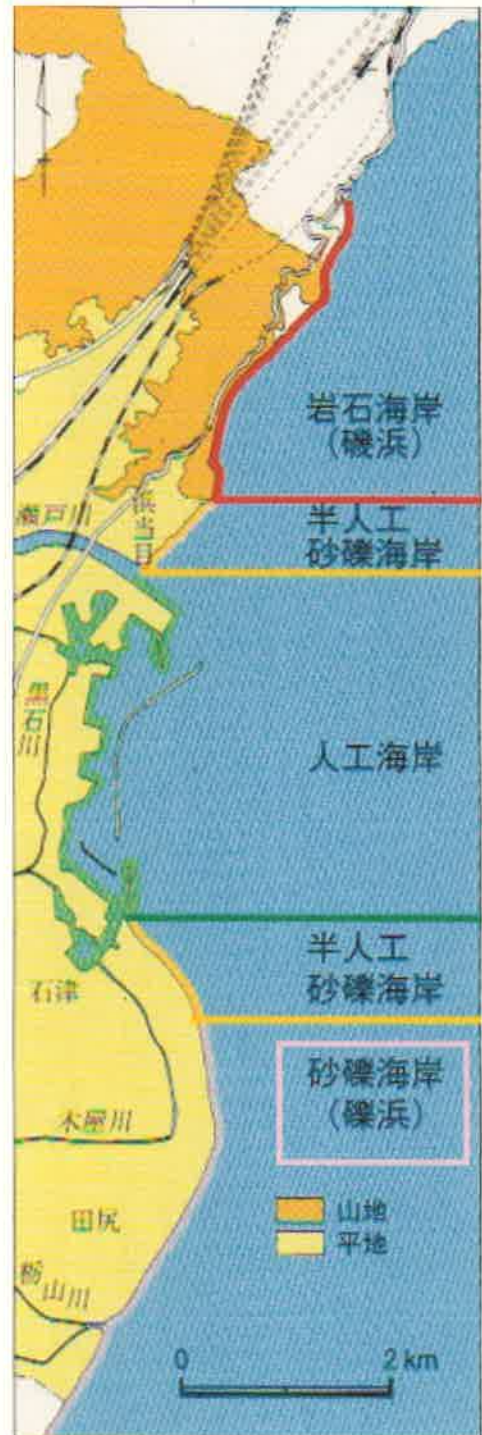
◎石津・和田浜の地形

焼津市の海岸は、大崩海岸（岩石海岸）以南は港などの一部の人口海岸を除いて「砂礫海岸」と呼ばれる砂と小石によって形成される海岸になっています。

特に小川漁港より南（石津・和田浜）は礫を主体とする低平で弓なりの海岸線が特徴です。この海岸で見られる平たく丸い礫は大井川の川床の礫と同じで、大井川が海に掃きだした礫が波や海流で運ばれてきたものと考えられます。礫や砂が波によって運ばれてきたときに、海岸沿いにできる段を「汀段」といい、田尻の地区の内陸部にも海岸線と平行してこの汀段と思われる地形があり、かつての海岸線の名残と考えられます。この地形は現在の海岸線から500mほど内陸にあり、海岸が大分沖合に進出したことがわかります。



波による礫の運搬（概念図）



海岸の分類図

← 『焼津市史 図説・年表』(焼津市、2008年)より作成

○大井川の流路と木屋川の水運

昔の大井川の流路は、現在よりずっと東北を流れており、川瀬が幾筋にも分かれていました。一番東の流路は、現在の黒石川あたりといわれ、この地域一帯はたびたび洪水の被害を受けていました。

その後、駿河領主中村^{なかむらがすうじ}一氏による天正の瀬替え（天正 18 年（1590））によって、大井川の流路はほぼ現在の位置に固定され、江戸時代以降現在の焼津市、藤枝市、島田市に新田が開発されていきます。

木屋川は大井川から分かれた川のひとつで、その名の通り木屋すなわち材木屋が木材搬出に利用したことから木屋川と名付けられました。

江戸時代はじめ、紀伊国屋文左衛門が大井川上流部の井川山中から伐り出した材木を大井川にバラ流しし、現在の島田市向谷^{むくや}に設けた水門から竜泉川などを経て栃山川へ入れ、そのまま和田浜に出してから和田湊（現在の小川港）に回送し、そこから江戸へ送ったそうです。その後、栃山川から木屋川を経て和田湊に送るルートが開かれました。

明治 13 年（1880）には、地元有力者が資金を出して通船会社を設立し、木屋川を木材搬出に利用しました。

*焼津神社の荒祭りで行列の先頭を行く「獅子木遣り^{ししきや}」の木遣り歌（重い木材を運ぶ時の掛け声が転じて歌になったもの）は江戸木遣りの流れを汲むといわれています。この木屋川を利用した江戸への木材の運搬がこうした文化の交流をもたらしたといえます。

④境石

境界石などとも呼ばれます。村や領地の境界を示す石で、古来よりこうした石や大きな岩あるいは木などを目印として村の境界の目印としました。

この石は田尻村と田尻北村の境界線上に置かれたものです。いつ置かれたものであるかは不明ですが、この位置は現在の田尻と田尻北地区の境とほとんど変わりません。

⑤水神社^{すいじんしゃ}

祭神は弥都波能売神^{みすはのめのかみ}、宇気母智神^{うけもちのかみ}。

詳しい由緒はわかりませんが、古くに波除けのため勧請したと伝わっています。

水神は水にまつわる神様の総称で、川神、井戸神、あるいは生業にかかわる水の神など神格は多様です。灌漑用水や水害防止の守護神であり、焼津市内では洪水や高潮などの水害を恐れ、水神を祀っている場所が多く、水天宮境内にも合祀されています。瀬戸川沿いにも水神様の祠などが多く見られます。

⑥山梨^{えきち}恵吉の碑

山梨恵吉は明治時代、田尻北浜^{おおしきあみ}で大敷網（今の定置網）の導入に尽力した人物です。

当時、田尻の浜では主に地曳網が行われており、そのほかには和船でのカツオの一本釣りや手繰り網などがありました。しかし、魚の取れ高や値段が安定しないため、昼は農業を行う半農半漁の生活をしていました。

そうしたなか、明治45年（1912）に高知県の高橋長次郎がこの地に来て、潮流や水温を調べ大敷網に適していることを明らかにし、出資をするので大敷網を行うように勧めました。最初、地曳網漁を行っていた人々は反対しましたが、恵吉が暮らしを良くするためだと説得をして漁師たちは大敷網を始め、年間を通じて多くの魚を獲ることができるようになりました。

○定置網

定置網は、魚の回遊する場所に網を設置して、その網の中に入り込んだ魚を獲る漁法です。網船に乗った漁師十数名がだいたい朝晩の定時に網を繰り上げて、ブリやアジ、サバ、サワラ、イカ、タチウオなど様々な種類の魚を獲ることができます。

田尻の沿岸は、突き出した浜の部分が「カド」「カドの浜」と呼ばれています。カドの浜は海底地形がちょうど変化する地点のため、定置網の片側は水深が深く、片側は浅くなり、ニヤシオ（南潮）にのって駿河湾を北から回遊してくる魚を捕えるのに最適な場所といわれます。最初は年間を通して行われていましたが、多くの人手や経費がかかることや網の保全のためにしばしば網を敷設しなす必要があることなどから後に時期を限って（正月から春先、夏網、秋網）行うようになったそうです。

⑦田尻北の波除地蔵^{はちべえ}と八兵衛さん

○波除地蔵

このお地蔵様について詳しい事は伝わっていませんが、地元の話では次のような逸話が残っているそうです。

大正のころ、大きな台風が来て、大波が防波堤を越えてあっという間に村は水浸しになってしまいました。家の中のものがブカブカ浮いていたり、波に持ち上げられた船が近所の家の中に入ってしまったりと大変な被害に遭ったそうですが、この波で亡くなった方は一人もいませんでした。それは、大波がきた時、お地蔵様が「波がきたぞー」と知らせて歩いてくれたからといわれており、姿を見た人もいます。地元の人々はお地蔵様に感謝をして、この地にお地蔵様をお祀りし、それからは波が防波堤を超えることはなくなったそうです。

○八兵衛さん信仰

八兵衛さん信仰は焼津・藤枝・島田市域など大井川平野一帯に見られる疫病除けや厄除けの信仰です。

八兵衛さんがどういった人物であったかを明示する資料はありませんが、伝承によればこの地域に伝染病が大流行し、人々が苦しんでいた時にたまたま通りかかり、持薬を施した旅の聖が八兵衛さんであったといえます。このため、石津・田尻などで「薬売りの八兵衛さん」などとも呼ばれています。以降、八兵衛さんはこの地に留まり、死後自分を祀れば悪病にかかることはないという遺言を残したことから霊人として祀られるようになったと伝えられます。碑銘に「紀伊国川中島八兵衛」「西国川中嶋八兵」などに見えることから西国、和歌山県の聖であると考えられますが、はっきりしたことはわかりません。

八兵衛さんの碑の多くは河辺や海辺に祀られてきたようですが、近年は河川の改修などで移動しているものも多いようです。

八兵衛さんの供養祭では「オショーヤ」（念仏）を唱え、僧侶による読経などが行われますが、オショーヤの文言は地域によって若干異なっています。ここでは毎年8月24日、長久寺の僧侶によって供養祭が行われ、南地区にある波除地藏・八兵衛さんや堤防脇にある馬頭観音の供養も同日に行われます。

◎水天宮

祭神は言仁尊ことひとのみこと（安徳天皇）。

水天宮は地区住民の産土神うぶすなかみ的存在です。創建については、「石津水天宮由来記」に次のような話が記されています。

安政3年（1856）の春、江戸の材木商人が御用材（幕府が使う材木）を集めるためにこの地へ来ました。当時は、山から伐り出した木材は大井川を下り、木屋川を利用して流して和田湊に集め、そこから江戸へ送っていました。ところがその年の8月、大嵐がやってきて、積んであった材木は、全部海に流されてしまいました。困った材木商人や村の人たちは、九州の久留米に祀られている水天宮にお祈りをしました。すると不思議なことに、流された材木が全部近くの岸に打ち上げられたのです。喜んだ商人や村の人たちは相談して、新しく作る貯木場に水天宮を祀ることにしました。そして、久留米藩主の有馬氏の江戸屋敷から水天宮の神様を分けてもらい、ここに祀りました。

その後、水天宮は村全体の神様として祀られるようになり、古くから信仰されてきた水神社と津島神社も水天宮の境内に合祀されました。

水天宮は水難除けや安産の神様として信仰を集め、なかでも漁師たちの信仰が篤く、豊漁や海の安全を守っています。水天宮に厚い信仰をよせている漁船は、水天宮のお札を竹筒に入れて碇に結びつけたり、出漁の際には水天宮沖で船首を水天宮に向け、縁起周り（ヒカエマワリ）などといって、取り舵で3回旋回します。

○水天宮の例大祭

水天宮の例大祭は4月5日に行われています。当日は漁船の船元たちがフライキ(大量旗)を掲げ、掛魚(カケイヨあるいはアゲウオ)を奉納します。以前は、これらの魚はおろしてから世話役が値段をつけて、水天宮から川を挟んで反対側にある小川屋の前に並べて、ほしい人に売ったそうです。



奉納された掛魚

こいずみやくも ～小泉八雲と和田浜～

明治の文豪小泉八雲は避暑地として焼津を気に入り、夏はよく浜通りの山口乙吉やまぐちおときちの家に滞在していました。八雲は焼津の海が好きでよく浜に出かけていましたが、海が荒れている時などは、息子の一雄を連れて比較的波の穏やかな和田浜を訪れました。一雄は自身の著書の中で和田浜について、美しい砂浜が坦々と海中へ延びていて、当目の浜と比べて波が穏やかで、水が気味が悪いほど青く澄んでいると記しています。

八雲と一雄は和田浜を散歩する際には、いつも乙吉の知り合いの掛茶屋(現在の小川屋)で休憩し、ラムネを飲んだそうです。八雲は、一雄が喜ぶもののひとつとしても「和田のラムネ」をあげています。

「和田のラムネとは和田と申す處で飲むラムネの事です。(中略)眞夏の太陽が照りつける濱路傳ひに一里餘の道程を飛蝗を捕へたり蜻蛉を追ツ駈けたり蟹を押へたりし乍ら漸く和田に着いて此處の茶店で飲む冷い玉ラムネは實に泣き出し度い程の美味でした。父が私の甚く喜ぶものゝ一つとして是を數へ上げたのも無理からぬ事です。」

(小泉一雄『父「八雲」を憶ふ』抜粋)

⑩小川港の沿革

○昔の小川湊と長谷川氏

小川湊の歴史は古く、古代東海道の小川駅と連動して海上交通の駅である湊が近くにあったと考えられます。しかし、はっきりした位置は分かっておらず、現在の港の位置とは違う場所、もっと東北部にあったと考えられています。室町時代の記録からは、小川湊が利用されたことやその近くに長者屋敷と呼ばれる「小川城」があり、城の主である長谷川氏は港の

支配を通じて大きな力を持っていたことがわかります。

長谷川氏の出自についてはよく分からないところが多いものの、法永長者と呼ばれた^{はせがわまさのぶ}長谷川正宣からは系譜がつながっています。

長谷川氏は今川氏と関係を結んでおり、文明 8 年（1476）の今川義忠の死後に起きた家督争いの際、義忠の室北川殿が幼い^{たつおうまる}竜王丸（後の^{いまがわうじちが}今川氏親）を連れ、城主の正宣を頼り小川城に身を寄せていたといわれています。

正宣が開基（寺院を建てるのに必要な経済的支持を与えた者、または世俗在家の実力者）となった林叟院は、現在坂本の地にありますが、昔は小川湊の近くにありました。林叟院が坂本の地に移ったのには、次のようなお話が伝えられています。

～明応の津波と林叟院～

今から 500 年ほど前のお話です。今は海になってしまいましたが、小川港の沖に林叟院*というお寺がありました。このお寺は法永長者と呼ばれた小川城主の長谷川正宣が、^{けんちゅう}賢仲というえらいお坊さんをまねいて建てたものです。

あるとき、お寺に不思議な老人が訪れ、賢仲に、「ここは危ない。お寺を移す方がよいでしょう。」と言って、賢仲を連れて、高草山のふもとまで行くと、「この地に」と指さしたとたん、消えてしまいました。賢仲は、寺に帰るとさっそく、これを長谷川正宣に伝え、急いでお寺を移すことにして、今の場所に林叟院が新しく建てられました。お坊さんが立っていたという石は、今でも林叟院に登る石段の大きな杉の根元にあり、^{さん}山^{じんせき}神石と呼ばれ、大切にされています。

林叟院が今の場所に移った次の年に大地震が起こり、津波にあって、元の林叟院があったあたりは海に沈んでしまいました。

大正時代までは、舟の上から海の中をのぞくと、かつての林叟院の石垣や、建物の跡がよく見えたそうです。

*上記のような出来事があったため、もともと林叟院だった寺名を林叟院（「叟」は老人の敬称）と改めたそうです。



林叟院跡地に建てられた碑

*長谷川正宣は今でも林叟院で大切に祀られています。林叟院が坂本の地に移った理由の一つには、正宣がもともと坂本の地頭、加納家の二男として生まれ、小川城主の長谷川長重の娘婿になった経緯があると考えられます。正宣は永正 10 年（1513）に 87 歳で亡くなりました。林叟院の境内には江戸時代の享和 2 年（1802）に長谷川氏の子孫が再建した正宣夫妻のお墓が残っています。



『小川村誌』（1913 年、小川尋常高等小学校）より作成

○小川港の整備

小川湊は中近世を通じて、物資の運搬などを行う港として小規模ながら重要な役割を果たします。

近代になってからは、鉄道やトラック運送などの陸送手段の発達により、物資輸送の港としての役割はなくなっていき、大正時代初期から漁業中心の港へと性格を変えていきます。しかし、漁獲高が上がっても整備されていない港では船を入れることができず、沖にとめて伝馬船で運び上げる「沖がかり」の方法しかとれませんでした。この不便を解消するために港の建設が計られ、昭和 9 年（1934）に本格的な船溜、道流堤、物揚場が完成しました。戦後になって昭和 26 年（1951）に小川港は村営漁港（当時は小川村）として築港工事が開始され、さらに昭和 44 年（1969）には焼津・小川両港区域が統合し、昭和 62 年（1987）には既存の掘込みの港の外側に外港が完成し、平成元年（1989）に内港にあった荷捌き機能が外港岸壁に移されました。このような整備を進めながら、小川港はサバ漁業及び近海漁業の港として発展していきました。

⑪^{しんこういん}信香院

曹洞宗のお寺で、山号は長谷山^{ちようこくざん}です。本尊は十一面観世音菩薩。

寺伝によると信香院の場所には、もともと坊さんたちの修行の道場がありましたが、永正14年(1517)の大きな暴風雨ですべてのお堂が壊れてしまったといわれます。当時の小川城主だった長谷川正長^{はせがわまさなが}はお堂を再建するために大きな支援をしました(開基は正長の父元長で、諸堂を完成させたのが正長ともいわれる)。そのため山号には、長谷川正長の戒名に由来した「長谷山」が付けられています。信香院を建てた正長は今川家の家臣であり、永禄13年(1570)に焼津に攻めてきた武田信玄と戦い、その後、浜松の徳川家康の傘下に合流しました。そして元龜3年(1572)、三方原の合戦において、弟の政久とともに討死しました。正長は信香院に葬られており、お墓が残っています。正長の次男宣次は家康に仕え、旗本となります。そして、その後8代目が池波正太郎の小説『鬼平犯科帳』の主人公として有名な鬼平こと長谷川平蔵^{のぶため}宣以です。

信香院は武田氏による兵火や暴風雨、大地震など様々な苦難に見舞われながらも、その度に再建を果たし、今でも多くの信仰を集めています。

○恵比寿尊天

焼津市には昭和56年(1981)に開かれた「焼津七福神霊場」があり、信香院も恵比寿尊天をお祀りする霊場のひとつです。恵比寿様は招福円満の神様で、商売繁盛、大漁満足を授けてくれます。古くは漁業の神で、七福神のなかで唯一の日本の神様とされています。右手に釣竿を持ち、左手に鯛を抱えて、にこにことした表情が特徴的です。

～「鬼の平蔵」と小川・長谷川家～

長谷川宣以は、池波正太郎の小説『鬼平犯科帳』で、主人公の「鬼の平蔵」として知られる人物です。宣以は若いころ、よく喧嘩をしたり、家のお金を使って遊び歩いたりした、やんちゃな性格だったといわれています。旗本として役に付いたのが31歳の時で、それ以後、順調に出世し、42歳の時に火付盗賊改方のトップとなりました。関東地方を荒らしまわっていた大盗賊の一味を全員捕まえたり、江戸で強盗などのひどい犯罪を繰り返していた葵小僧^{あおいこそう}を逮捕、処刑するなど手柄を立てました。職場の上司や同僚からはあまり好かれていなかったようですが、たいへん有能で勤務にはげんでおり、庶民からは親しまれていました。

宣以の祖先をたどると、小川城の城主の長谷川氏に行き着きます。宣以は小川城主で三方原の戦いで戦死した長谷川正長の次男の宣次の家系で、正長からは9代目、法永長者正宣からは11代目となります。

もっと知りたい！—周辺の史跡・文化—

○松の小径

小川港以南の水天宮の裏手から田尻北にかけて木屋川沿いに土手が続き、その上に松林が続いています。この土手と松は昭和22年（1947）の地図を見ると、今の小川港周辺を囲んで鰯ヶ島まで続いていたようです。これは水田に当たる潮風を防ぐために作られた防風林と考えられ、天保7年（1836）に田中藩主本多正寛ほんだまさひろが許可し資金を出して作らせたものであるといわれています。現在では「松の小径」と称され、散歩道として整備されています。

○トーロー（トーロン）

少し前まで石津浜では、8月16日にトーロー（灯籠）が行われていました。トーローを行う意味はあまり伝承されていませんが、本来は迎え火や送り火と同様に盆に祖霊を供養するための火祭りだと考えられます。

この地域では、16日の早朝から水天宮地先の出口浜でトーローを作り始めます。トーローが出来上がると梯子などを用いて大勢で起こして固定します。夕方5時を過ぎるとトーローの前に祭壇を設けて僧侶の読経のあとオショーヤを唱え、浜の流木で元火を焚き、その火を松明に移し、トーローめがけて投げて点火させます。

○成道寺じょうどうじ

成道寺は、もともと法鏡山光源寺ほうきょうざんこうげんじという名前で文保元年（1317）に開創されたお寺であったと伝わりますが、戦国時代に徳川と武田の戦いによって大きな被害を受けており、詳しいことは分かっていません。最初は臨済宗のお寺でしたが、永禄10年（1567）に武田家の武将・秋山信友あきやまのぶともがお金を出して、曹洞宗のお寺として再建しました。なお、秋山信友はその後、岐阜県恵那市の岩村城主となり、のちに織田信長によって殺されてしまいますが、子孫は徳川家康に仕えて、成道寺に参詣しています。

成道寺には歴代ですぐれた住職が出て優秀なお弟子さんを何人も育てました。江戸幕府も成道寺を支援し、若いお坊さんを育てるお寺として大いに発展しました。お寺には焼津市指定文化財の「宝篋印塔」ほうきょういんとう（江戸時代）や「百萬塔」ひゃくまんとう（奈良時代）、また焼津市内唯一の国の重要有形文化財になっている「絹本墨画淡彩芦葉達磨図」けんぽんぼくがたんさいるようだるます（鎌倉時代）など貴重な文物も多く所蔵されています。



▲成道寺の芦葉達磨図
(国重文)